奈良・藤原宮跡

1 所在地　奈良県橿原市縄手町・飛騨町

2 調査期間　西面中門地域　一九八三年(昭58)八月～一二月、
宮南面外周帯地域　一九八三年八月～九月

3 発掘機関　奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

4 調査担当者　狩野　久

5 遺跡の種類　宮殿・官衙跡

6 遺跡の年代　七世紀末～八世紀初頭

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一　西面中門地域(第三七次調査)

当調査は宮の西面で、宮の東西中軸線上の西面中門推定地で行った。面積は一〇〇八㎡である。

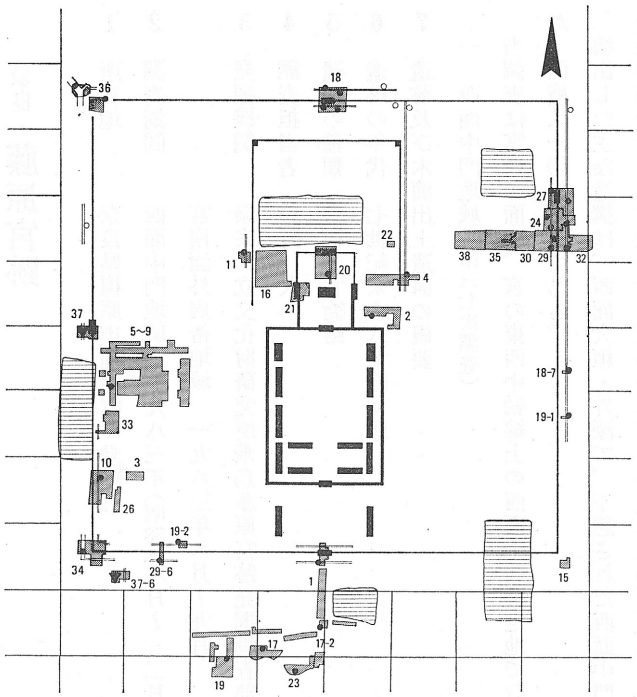
検出した主な遺構は、西面大垣・外濠で、予想された西面中門は後世の削平をうけて検出できなかった。その他には藤原宮期以後の井戸や土壙がある。木簡は外濠から二点出土した。

大垣は調査区南端で四間分の柱掘形を検出した。その規模は、掘形の一辺が一・五m、柱間は二・六六m(九尺)等間で、従来の大垣の所見と一致する。西面中門は検出できなかったが、大垣の柱掘形がとぎれる所から北が中門跡と考えることができる。宮の中軸線と

今回検出した大垣の北端までの距離を北へ折り返すと南北三〇・四mとなり、これまで調査した宮城門と同規模の門が存在したものと考えられる。また中門の推定地付近で、原位置は動いているものの、特殊な構造をもった礎石と石製の唐居敷（からいしき）を発見したことは宮城門の構造を知る上で収穫であった。

西面外濠は大垣の西方一三mにあり、北流する。現状では後世の氾濫や浸蝕により東岸がかなり広がっているが、当初は他の外濠と同じく五・五m～六・〇m程のものであったとみられ、大垣と外濠の心々距離は二一m前後と推定される。濠の深さは二・一mである。宮の廃絶後、濠の中央付近に南北にシガラミが作られ、その西では堆積が固定したらしいが、東では水流がかなりあり、細流が何度も流路を変えて流れたので、層位的に堆積土を分けることは困難である。総じて藤原宮時代の遺物は乏しく、出土土器の七〇％は奈良時代前半のもので、平安時代のものもまじる。濠は一〇世紀末頃に埋没したのであろう。木簡は、一点は最下層のシガラミ設定以前の層で検出したが、これは奈良時代かあるいは藤原宮期に入るのかは決定できない。小断片で文字は判読できなかった。他の一点はシガラミの付近から出土したもので、奈良時代の可能性がある。

他の遺物としては、土器、瓦のほか、円面硯、土馬、銭貨（和同開珎・神功開宝・隆平永宝・富寿神宝・饒益神宝）、帯金具、鉄釘、鉄棒、多足机等が出土し、墨書土器では「宮」と記したものが六点あるの



●文化財研究所調査
○奈良県調査
数字：調査次数

藤原宮跡出土木簡地点図

が注目される。

この他の遺構としては井戸三基が外濠の岸付近に作られており、九～一〇世紀のものと考えられる。

二　宮南面外周帯地域（第三七―六次調査）

当調査地は宮の西南方に当り、南外濠と六条大路北側溝との間の外周帯と仮称する空閑地内で、一部大路北側溝も含んでいる。面積は六三〇㎡である。

検出した主な遺構は、南北溝一条と井戸一基がある。木簡は井戸から一点出土した。

南北溝は幅五～六m、深さ一・四mで、断面逆台形を呈する。埋土からは弥生式土器片、削り掛け、七世紀前後の土師器、須恵器片、丸・平瓦が出土した。この溝は西二坊坊間小路の中軸線の位置にほぼ一致するが、宮の外濠と同規模であることからみて、南面外濠へ注ぐ京内の基幹水路として作られた可能性がある。

井戸は深さ二・六mで、井戸枠が六～七段残っており、井籠組で、東西九五㎝、南北七五㎝ある。底に礫を敷きつめており、埋土は灰色粘質土で、その中から木簡が出土した。他に遺物は少なく、弥生式土器片、七世紀末頃の土器片がある。

なお、六条大路北側溝と西二坊坊間路は削平をうけたためか検出できなかった。

右の遺構の他に下層で弥生時代の溝や、小穴群を確認した。

8　木簡の釈文・内容

一　西面中門地域

(1)　「□　□　見奴久万呂□□□　(152)×(11)×4　081

二　宮南面外周帯地域

(1)　・「千字文文　(88)×50×5　065

・「□〔有カ〕辯辯

習書であるが、「千字文」の中に「有辯」と続く箇所はない。

9　関係文献

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報十四』（一九八四年）

（加藤　優）